

## ビントリーのシンデレラ

バーミンガム・ロイヤル・バレエによる魅力的な舞台を、ヴィキ・ウェストールのレポートでお届けします

観客がおとぎ話バレエに求めるものが、すべて揃った公演だった。愛らしさ、魔法、ユーモア、ジョン・マクファーレンの素晴らしい装置と衣裳、まばゆい輝き、そして物語やダンサーを引き立てる振付。ビントリーは、時に技巧に傾いてクライマックスの盛り上がり弱いのところのあるプロコフィエフの音楽に潜んでいる、私たちに現実を生々しく体験させる愛や絶望、前兆、そして神秘の残響といったニュアンスをことごとく捉え、最大限に表現した。

第一幕は、なんとも陰気な台所が舞台だ。はじめとして壁はあちこち剥げ、奴隷のような境遇に置かれたシンデレラの哀れさをありありと感じさせる。継母は古今東西のこの物語中でも極悪で、その長く尖った指を一度突きつけられただけで恐怖を覚えるほど。義理の姉たち(おヤセとおデブ)の意地悪さは目をそむけなくなる。継母のマリオン・テイトは最高の女優で、眉の上げ下げ、口角のゆがみ一つひとつに味がある。おヤセのヴィクトリア・マールは悪意剥き出しにして顔を歪め、おデブのアンジェラ・ポールは腿の太さまでがじつにリアルだ。ダンス教師、かつら屋、仕立屋がやってきたところから場面は笑いに転じるが、二人のバイオリニスト(フィリップ・エアードとロバート・サイモンズ)も舞台上で登場させたことで、踊りのレッスンが活気あふれるものになった。平田桃子のシンデレラはみすばらしい身なりで卑劣な家族にこき使われているが、ひとり取り残された後のソロではわずかに残っていた生気を取り戻し、軽やかな拡がりを感じさせた。無理のない自然さと、輝くような笑顔の持ち主だ。

暖炉の前に坐り込んだ老婆の姿があかあかとした火の前に浮かび上がる仙女の登場場面は、この作品の大きな見せ場だ。さらにこの日のレティティア・ロ・サルドは、クリノリン・スカートに薄い生地を重ねた輝くロングドレス姿に変身した後は、この役を美と優雅さの化身として演じてみせた。カエルの御者、トカゲの従僕、子ネズミの小姓たちはおとぎの国の生き物そのもの(被り物がじつによい)、四季の妖精たちの出し方も理にかなっている。妖精たちのソロはいかにもビントリーらしい、高度で癖のある難しい振付だが、キャリー・ロバーツの夏の妖精は安定感のある、空間を大きく使ったみごとな踊りで、アリス・シーの冬の精は清澄で完璧だった。そして銀一色の衣裳に身を包んだまばゆい星のコール・ド・バレエで、最初の幕は閉じた。



デイヴィッド・ビントリー振付『シンデレラ』での平田桃子 Photo: E. Kauldhar/Dance Europe

第二幕の舞踏会では、バレエ教師が家令として登場するのが、なるほど気の効いた演出だ。ルイス・ターナーは控え目ながらとても可笑しく、特におヤセのアプローチをかわそうとする場面が秀逸。杖を使っての即席ボール・ダンスの場面などは、まさに爆笑ものだった。マールは趣味の悪い縞のタイツをことあるごとに見せつけておヤセのキャラクターを巧みにアピールしたが、おデブのポールは“特大カップケーキと王子のどちらを取るか”という最高の場面が用意されていたにも関わらず、やや笑いの底が浅かった。男性たちのかつらと裾の広がったフロック・コートといういでたちと女性たちの宝石の色のつややかな衣裳は、色も形も釣り合いがよく、ステップの物々しきやギャロップの華やかさを次第に増しながら、カリカチュアと境を接する摂政時代の浮かれ気分を巧く描き出していた。王子役のセザール・モラレスは、アラベスクやピルエットでの教則本のような正しいポジションに加えて、ソロもパートナーリングも上出来。テクニクは完璧に近かったのだが上品すぎて、私には、一目惚れで心を乱される若者には見えなかった。平田は小柄ですべてを備えたバレリーナで、舞台を統べるようにして輝きを放っていた。王子の四人の友人は皆素晴らしかったが、特にタイロン・シングルトンの優雅さとブランドン・ローレンスの抑えがたいほどの“踊る歓び”は、思いがけない収穫だった。

第三幕。靴の山の上のダンス教師がうんざり顔で、我こそはと列をなす娘たちの相手をする光景で始めたのは、独創的だ。第一幕のシンデレラのきらびやかなガラスの馬車、第二幕の巨大な時計(宮廷人たちの動きが秒を刻むのが、さらなる効果を上げた)と並ぶ、この作品の名場面だ。そして台所に戻ると、場をさらったのはまたもテイト(小さな靴に、無理やり足を押し込もうとする)。その後装置は跡かたもなく消え去り、残されたシンデレラと王子が、コーエン・ケッセルのタクトとロイヤル・バレエ・シンフォニアの演奏に導かれて空へ駆け上がるように最後のグラン・パを踊り、胸に迫るフィナーレを迎える。じつに素晴らしい、クリスマスの贈り物だった。(訳:長野由紀)